

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.237

5-6

May-June 2020

ベートーヴェン
が“ここ”が凄い!

特集

02

06 ワーヘリ (外園祥一郎&次田心平) インタビュー

09 水戸芸術館サウンド・ライブラリー/小澤征爾館長&マルタ・アルゲリッチの新譜、世界同時リリース!

10 「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし その5

12 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

ベートーヴェンの“9大”ここが凄い!

～「楽聖」の生誕250周年にちなんで～

文・関根哲也



ベートーヴェンの肖像画(1803年)

今年生誕250年を迎える楽聖！ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)。水戸芸術館ではその記念の年に合わせ、「ベートーヴェン～時空を超えて～」というタイトルで5つの演奏会を企画し、その音楽の真髄に迫ります。

新型コロナウイルスの影響で、残念ながら中止となる演奏会もございます。4月23日のアレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)に続き、6月6日のアトリウム弦楽四重奏団も公演中止が決まりました。今後もお断念を許さない状況が続きそうですので、最新情報はウェブサイトをご確認ください。

さて本誌では、ベートーヴェンのどこが凄かったのか、筆者の独断と偏見も交えつつ、あらためて考えてみたいと思います。偉大なる交響曲の数にちなみ、題して「ベートーヴェンの“9大”ここが凄い!」。大変畏れ多いのですが、読者の皆様にはこの機会にベートーヴェンの音楽にあらためて触れていただき、その音楽の“凄さ”を再認識していただければと思います。

1. 俺様タイプの生きざまが凄い!

ベートーヴェンが生まれたころ、音楽家はまだ封建制度の世の中で教会や王侯貴族に仕える身分でした。ハイドン(1732～1809)はハンガリーの大貴族エステルハーゼ侯爵家で長く宮廷楽長を務め、モーツァルト(1756～1791)はハイドンのような安定した地位を得るべく、旅をしながら就職活動を続けますが、

めばしい結果は得られず“ジリ貧”の晩年を過ごすこととなります。

先輩たちと比べて、ベートーヴェンはなんと尊大にふるまったことでしょう!モーツァルトの死の翌年(1792年)に生まれ故郷のボンを離れ、ウィーンにやってきたベートーヴェンは、ハイドンの紹介を得て有力な貴族リヒノフスキー侯爵邸で暮らし始めます。ピアノと即興演奏で貴族たちに才能を見せつけるや否や、ウィーンの音楽界を瞬く間に席卷してしまいました。音楽的才能ばかりでなく、相手が誰であろうと物怖じしないベートーヴェンのやや荒っぽい性格も、貴族たちから面白がられたのでしょう。この時期に作曲された作品2のピアノ・ソナタ(第1番から第3番までの3曲)には、自信たっぷりの若きベートーヴェンの姿がそのまま切り取られているかのようです。

後年、〈運命〉と〈田園〉が同時に初演されるという伝説の演奏会(1808年12月)が大失敗に終わった後、ウィーンという都市に嫌気がさした

ベートーヴェンは、カッセルの宮廷楽長に転身しようとはしますが、ウィーンの有力貴族たちはお金を出し合っただけでなんとかベートーヴェンを慰留しました。ベートーヴェンは、「市民の台頭」という新しい時代の流れを味方につけ、「俺様」の生き方を貫いたのです。

2. 交響曲が凄い!

“不滅の9曲”、言わずもがな。ぜひ全曲聴きましょう。小澤征爾館長と水戸室内管弦楽団によるベートーヴェン・シリーズは第3番(英雄)と第6番(田園)以外はレコーディングされています。いずれも名演です。それ以外なら、私はラトルとベルリン・フィルによる全集をLPで聴くのが好きです。

ハイドンの100曲以上、モーツァルトの40曲以上と比べ、ベートーヴェンの9曲という桁違いの少なさが、交響曲創作の重みの変化を物語っています。王侯貴族の催事の“序”としての役割を果たしていた交響曲は、ハイドン、モーツァルトの後期には自律した音楽作品へと姿を変え、さらにベートーヴェンが「作曲家の世界観の表明」とでも言い得る大規模な曲種へと発展させました。その最たるものが、崇高な人類愛を歌った〈第九〉でしょう。新型コロナウイルスで「抱きあうこと」も「接吻すること」も儘ならぬ昨今ですが、ベートーヴェンのメッセージは不滅であると信じたいですね。

3. 弦楽四重奏曲が凄い!

全16曲、その内容の濃さは交響曲以上という説もあります。ぜひ全曲聴きたいところです。前期(作品18の6曲、第1番から第6番まで)、中期(〈ラ

ズモフスキー)3曲に〈ハーブ〉と〈セリオソ〉、すなわち第7番から第11番まで)、後期(第12番から第16番までと〈大フーガ〉)という3つの時期に分けて聴くと、全体を把握しやすいと思います。

ベートーヴェンの作曲の歴史を振り返ると、交響曲の場合、楽器編成の増大がありました。初期のシンプルな2管編成から、〈運命〉や〈田園〉では交響曲史上初めてトロンボーンやピッコロを使用しましたし、〈第九〉では独唱者とコーラスまでが加わります。後述のピアノ・ソナタの場合も、楽器の進化と作曲法とが密接に結びつき、使用する音域や表現力が年を追うごとに増していきます。

しかし、弦楽四重奏曲の場合は、基本的に楽器も編成も変わりません。第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという4つの弦楽器による合奏というシンプルな形が常に保たれています。それ故、作曲家としてのベートーヴェンがいかに冒険し、挑戦し、技を極め、悩み、円熟し、深まっていたかが、他のジャンル以上にストレートに示されているのです。

4. ピアノ・ソナタが凄い!

全32曲。曲数はさすがに多いですが、第25番のように10分弱の可愛らしい曲もありますので、全集にした場合の総演奏時間は、交響曲や弦楽四重奏曲とさほど変わらないかもしれません。と言いかけて計らずにはいられぬ悲しい性……交響曲全集(バーンスタイン指揮ウィーン・フィル)が6時間5分、弦楽四重奏曲全集(ベルチャ弦楽四重奏団)が8時間40分、ピアノ・ソナタ全集(イゴール・レヴィット)が10時間5分でありました。ピアノ・ソナタはやはりそれなりに長いですね。演奏に40分以上を要する

第29番〈ハンマークラヴィーア〉のような大作もありますしね……。

でも、今年はぜひ全曲聴きましょう。おすすめの聴き方は、作品番号ごとにまとまっているものは「連作」として聴いてみる。例えば、第14番〈月光〉(作品27の2)は単独で演奏されることがしばしばですが、実は《幻想曲風ソナタ》作品27として出版された2曲のうちの1曲なのです。第13番(作品27の1)と並べて聴くと、また違った味わいが発見できるかもしれません。

楽器の発展が、ベートーヴェンの表現を“深化”させたことも見逃せません。例えば、チェンバロが一般にほとんど使われなくなった頃、すなわち1802年作曲の作品31のソナタあたりからは、楽譜にペダル記号が付けられるようになりました。フォルテピアノでの演奏が当たり前になったことの証です。第17番〈テンペスト〉(作品31の2)の第1楽章再現部、右手だけで演奏されるレチタティーヴォ部の幻想的なペダルの効果など、非常に印象的です。また、1818年の誕生日にはイギリスのブロードウッド社から新しいピアノが贈られ、第29番〈ハンマークラヴィーア〉はこのブロードウッドの拡張

された音域に合わせて作曲されました。古いピアノでは音域が足りず、演奏できなくなってしまった訳です。

5. 「全集」への意識が凄い!

「これからの作家はすべて自分の全集を書くことになるだろう」と語ったのは、ベートーヴェンよりも少し先に生まれたゲーテでしたか、とにかくベートーヴェンは自らの「全集」を意識した最初の作曲家であったと言えるでしょう。すなわち、ひとつひとつの作品が、自分の「全集」の中でどのような位置を占めるかについて、初めて意識的に仕事をした作曲家がベートーヴェンでした。

まだウィーンに出てきて間もないころ、ハイドンに師事していた若きベートーヴェンは、自信作の〈ピアノ三重奏曲〉のうち3曲目だけは出版しないようにハイドンから注意され、機嫌を害します。おそらく、老大家ハイドンの目には野心的に過ぎると映ったのでしょう。ほぼ同じ時期にベートーヴェンは〈ピアノ・ソナタ〉の作曲にも取り組み、こちらはハイドンに献呈されました。果たして、ベートーヴェンが選んだ作品番号は〈ピアノ三重奏曲〉



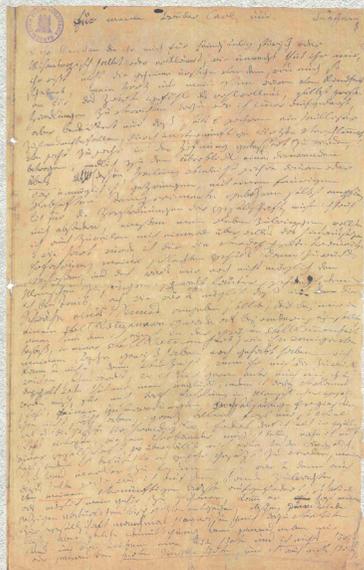
ブロードウッド製のピアノ

が1、〈ピアノ・ソナタ〉が2。栄える“作品1”(結局3曲まとめて出版されました)に、師匠への反抗心を滲ませた形です。後に編まれることになる自身の「全集」の冒頭を飾る作品として、ベートーヴェンが意識して選んだ結果でしょう。

同時代でベートーヴェンとまったく対照的な存在と言えるのが、イタリア・オペラの巨匠ジョアッキノ・ロッシーニ(1792~1868)でした。作品番号などお構いなし、序曲のまるごと転用や旋律の使いまわしも日常茶飯事(有名な〈セビアの理髪師〉序曲も転用のまた転用!)。ベートーヴェンも“嫉妬”するほどの人気を誇ったロッシーニには、「全集」を意識している暇などなかったのでしょう。

6. 難聴に打ち勝ったのが凄い!

20代半ばから耳が聞こえづらくなっていたベートーヴェンは、ついに1802年10月、有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』をしたためます。実弟たちに宛てて書かれたこの遺書には、聴力を失いつつある作曲家の想像を絶する苦悩が生々しく綴られ



ハイリゲンシュタットの遺書

ています。

「ああ!他の人々にとってよりも私にはいっそう完全なものでなければならぬ一つの感覚(聴覚)、かつては申し分のない完全さで私が所有していた感覚、たしかにかつては、私と同じ専門の人々でもほとんど持たないほどの完全さで私が所有していたその感覚の弱点を人々の前へ曝け出しに行くことがどうして私にできようか!」

しかし、さらに読み進めると、これは単なる遺書ではなく、自殺まで思い至るほどの生命の危機を克服した強靱な精神の証言であると思えてきます。

「たびたびこんな目に遭ったために私はほとんどまったく希望を喪った。みずから自分の生命を絶つまでにはほんの少しのところであった。一私を引き留めたものはただ“芸術”である。自分が使命を自覚している仕事を仕遂げないでこの世を見捨ててはならないように想われたのだ。」(以上、片山敏彦訳)

この遺書から読み取れる精神的克己の構図は、〈運命〉や〈第九〉に聴かれる“闘争から勝利へ”というベートーヴェン独自の劇的な展開に直接結びつくものと言えるでしょう。その音楽のエネルギーは、生誕250年を経た現代においてもなお熱く、聴く者に精神の高揚や困難に立ち向かう勇気を与えてくれます。本シリーズ企画のサブタイトルに掲げさせていただきましたように、ベートーヴェンという存在はまさに「時空を超えて」いるのです。

7. BGMにならないのが凄い!

前項で触れましたように、“闘争から勝利へ”という筋書きとただならぬ爆発力をベースにしているベートーヴェンの音楽は、とてものではありませんがBGMにはなりません!食事中に、

例えば〈ラズモフスキー〉第1番(弦楽四重奏曲第7番)が流れてきたらどうなるでしょうか。食事を中断して聴き入るか、“ウルサイ!”と怒鳴って再生をプチ切るかのどちらかでしょう。

王侯貴族からの注文に応じて作曲されていたハイドンやモーツァルトの作品の多くは、BGM的な要素をその本質に含んでいました。彼らの円熟期に書かれた弦楽四重奏曲の名作でさえ、BGMとしても耐え得る性格を持っています。

1789年からのフランス革命を大きな契機として時代は急速に変わり、ベートーヴェンはその時代とともに音楽の変革を一気に押し進めました。いわゆる機会音楽も書いてはいるものの、例えば舞曲や吹奏楽曲など彼の芸術上の理念に合致しない作品は、作品番号さえ与えられていません。ちなみに、それらには20世紀半ば、音楽学者らの手によってWoO(作品番号なし)として番号が付けられ、現在は識別しやすくなっています(例えば〈エリーゼのために〉はWoO 59)。

8. 晩年の創作力が凄い!

ベートーヴェンの作品年表を眺めると、1816年(45歳)ごろから作品の数が減り始め、1821年(50歳)にはほとんど作品が完成されていないことがわかります。甥カールの後見問題にずっと悩まされ続けてきた長年の疲れに加え、かねてより患っていた難聴や内臓疾患がこの時期ますます深刻になり、ベートーヴェンは精神的にも肉体的にも、どん底ともいえる状態にまで落ち込んでしまったのです。

ごく普通の人間なら、創作への意欲も同時に衰えてしまうはずですが、ベートーヴェンは、たとえ病床にあっても音楽への情熱を絶えず燃

やし続けていました。

1822年(51歳)以降に生まれた作品は、まさしく奇跡としか言いようのない傑作ばかりです。1822年にはピアノ・ソナタ〈第31番〉と〈第32番〉が、1823年には〈ディアベリ変奏曲〉や〈ミサ・ソレムニス〉が、1824年には〈第九〉交響曲が、1825年から1826年にかけては後期弦楽四重奏曲が生み出されています。とりわけ後期弦楽四重奏曲は、最晩年のベートーヴェンが綴った音楽上の遺言とも言い得る偉大な作品群です。

故 吉田秀和・水戸芸術館初代館長が、あれは企画運営会議の折でしたか、「ベートーヴェンが他の作曲家とくらべて何が決定的に違っていたかって、それは晩年の創作力だよ」と断固とした口調で語っていらしたのが、私の耳の奥に 아직도響いています。その吉田館長が、晩年、今までになかった新しい形と内容による評論集『永遠の故郷』(全4冊)を完成させました。晩年のベートーヴェンを意識なさっていたのかどうか、ご本人にお尋ねすることはもうありませんが、私なぞはご両人に共通する人並外れた情熱と意志の力を感じずにはいられません。

9. 後世への影響力が凄い!

ブラームスが偉大な先輩を意識しすぎて交響曲〈第1番〉を完成させるまでに20年以上を費やしてしまった、という有名な逸話もあるように、ベートーヴェンは後世の作曲家に計り知れない影響を与え、その存在は乗り越えられぬ高い壁のようになっていました。「ベートーヴェン」という名前だけで偉大さや権威が表象され、その存在はあらゆる芸術家の理想像ともなりました。

「芸術」の概念は、18世紀後半から

カントをはじめとするドイツ観念論でさらに深く考察され、シェリングやハンスリクになると、人間の最高の精神的所産かつ生産活動として、芸術は崇拜されるべき地位を獲得するに至ります。(このあたりは中村晃芸術監督による本誌不定期連載「ブンカ」と「ゲージュツ」のはなし)に詳しいので、合わせてご覧ください。)ベートーヴェン自身も、当時新進の哲学書にも目を通し、

自らの生き様を、社会における斯くあるべき芸術家像に近づけようと努力していたに違いありません。

しかし、その死後訪れる急激なベートーヴェン崇拜の動き、すなわち「神格化」は、ベートーヴェン自身も予想し得なかったことでしょう。シューマンの評論やヴァーグナーたちの演奏活動、さらにロマン・ロランの著書『ベートーヴェンの生涯』(1903年)などが、ベートーヴェン神格化を後押ししました。日本でも、「楽聖」という称号がベートーヴェンに冠せられ、数々の困難に立ち向かい不屈の精神力で傑作を書き続けた偉人として、伝記に描かれるなどしてきました。

近年、このような神格化は敬遠され、実は痼癩持ちであったことや女性との関係に少なからぬ問題があったことなども、包み隠さず伝えられるようになりました。ベートーヴェンのそんな小市民的な性格も、愛すべき側面としてとらえられ、より親しみを持たれる存在になったようです。演奏のニュアンスや、私たちの聴き方も、時



ベートーヴェンの肖像画(1820年)

代とともに少しずつ変わって来たのではないのでしょうか。生誕から250年、ベートーヴェンはやはり「時空を超えて」存在しているのです。

【重要なお知らせ】

5月6日時点の情報です。新型コロナウイルスの影響により、今後も中止または延期される公演が追加になる可能性があります。大変ご迷惑をおかけ致しますが、最新の情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

■シリーズ情報

シリーズ:ベートーヴェン
～時空を超えて～

- ①2020.4.23(木) [公演中止]
アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)
- ②2020.6.6(土) [公演中止]
アトリウム弦楽四重奏団
- ③2020.9.6(日)
ディオティマ弦楽四重奏団
- ④2020.11.15(日)
原田禎夫(チェロ) & 加藤洋之(ピアノ)
- ⑤2021.3.28(日)
ブルーノ・レオナルド・ゲルバー(ピアノ)